

活動報告

しきし とり はな 色紙に鳥や花を



上手に形を取ろうとするのではなく、無心になって筆を動かし、ゆっくりと水ににじんでいく色を楽しみます。



初めに塗った薄墨と、水彩絵の具が美しいハーモニーを描きます。



いつもとは違うやり方に、とまどう方も多かった中、すばらしいできればえに、先生の実験もこぼれます。



柔らかい水彩画の中に、墨色がピリリと効いた、すてきな作品となりました。

特別展「色彩の詩人 脇田和」展の関連イベント第3弾は、一般向けワークショップ「色紙に鳥や花を」です。脇田さんと同じ新制作協会の画家であり、臨床美術士でもある金本啓子さんに講師をお願いしました。

臨床美術士とは、脳科学に基づいたアートカリキュラムに沿って創造的な活動を行う専門家です。誰もが苦手意識を持つことないように工夫されたカリキュラムを通して、参加者の感性や生きる意欲を引き出していきます。このように言葉で書くと、何だか難しそうな感じがしますが、同じプログラムをなんと幼稚園でも実践されたとのこと。絵を描く知識も技術も必要ない画期的な方法と聞いて、期待に胸が膨らみます。

先生自ら活けられた花を見ながら、なんと、刷毛を使って薄墨の線を描いていきます。花や葉の形を取ろうとするのではなく、心で感じたイメージのままに、刷毛を軽やかに動かします。次に、水で濡らした色紙の上に水彩絵の具をたらし、にじんでいく様子を楽しみます。ものを描くというよりも、色のかたまりを作るといった感じです。いつもと違う進め方に、普段、対象をじっくりと見て正確に描く練習をされている方ほど、とまどいが大きかったかもしれません。

色あそびを十分に楽しんだあとは、割り箸ペンに墨を付けて輪郭を描いていきます。すると、それまでただの色のかたまりにしか見えなかったものが、一気に生命を吹き込まれ、見事な作品に生まれ変わりました。色のにじみや、色むらや、筆のかすれなどが、かえっていい味を添え、一人一人の個性を引き立てていました。

絵を描くことが好きな方はもちろん、どちらかというと苦手な方にも、ぜひおすすめしたいワークショップです！

[* 教育普及のページに戻る *](#)

Copyright Kure Municipal Museum of Art all rights reserved.